

「新たな彩り」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 校長室前の廊下には…



南先生は神高生の一先輩として、神戸高校に長く伝わる伝統を教えてください。校長室前の掲示板に張り出した公示。それもそのうちのひとつです。そこには先生方の役割分担が書かれ、私の名前に校長印が押されています。これは私が、先生方お1人お1人に「このような役割をお願いしました」との証です。

始業式を前に南先生から「校長印を使わせてもらっていいですか」と問われたので、「お願いします」と答え、できあがったものがこれです。兵庫県立高校で唯一27クラスある本校。ひたすらに細く長い公示は風情あるものです。

休業中とはいえ、この春も生徒の皆さんは実に忙しそうでした。出張が入ったため私は鑑賞ができなかったのですが、吹奏楽部の定期演奏会には1000人を超える方が集まったそうです。また、登校日を利用し、在校生が新入生を部活動に勧誘する恒例の光景も見ました。

早や1年前のことになるんですね。神戸高校に赴任する直前、私が偶然にもこの光景に出くわしたのは、その日のことを書いた去年の通信を今回は添えておきます。

さて、今年度の4月8日はいかがでしたか。スタートは新たに来られた先生方を迎えする着任式。壇上に20名の方が並ぶ姿は圧巻でした。白鷹教頭先生を新着任として紹介した際、



講堂内に？マークが漂ったのを見逃さなかった私が直ちに「大丈夫です。吉岡教頭先生もいます。だから今年、本校の教頭先生は2人です」と伝えた時の歓声はあたたかくて、とてもよかったです。

さて、これも神戸高校の伝統のひとつで、「始業式の日には表彰をしない」というものもあります。でも、私は披露しなかったのです。そこで始業式の式辞に取り込ませていただくことにしました。



さあ、隣を見てください。輝いている友達がありますか。それが花の姿です。その人はおそらく自分の成長のために一心に咲いています。蜜を分けてもらいなさい。心を和らげてもらいなさい。そんな友達を持つことを幸運だと思い、同じように皆さんが自分自身も一心に咲くことをめざしてくれたら、僕は嬉しいですね。

例えば、この春休み、ラグビー部員は埼玉県熊谷市で開催された第27回全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会に出場し、試合終了の笛が鳴る瞬間まで勝負を諦めない、そんな心意気を見せてくれました。全国大会常連校の大きな身体の選手に、怯むことなく真っ直ぐに立ち向かう姿は実に胸を打つものがありました。

また、森川陽貴くん、立ってもらってもいいですか。彼は第20回科学地理オリンピック日本選手権で見事に銅賞のメダルを勝ち取ってきました。実に眩しいですね。大切なのは本校に伝わる鍛錬主義です。「しっかりと自分らしい花を咲かせる」そのための努力を積み重ねる日々を、この1年もともに過ごしたいですね。

この度の式辞も拍手をいただき、ありがとうございました。1年前は反応が控えめな皆さんの姿に、何を話すべきか戸惑ってました私ですが、今は「話を聴いているよ」という顔をし、時には声まで発してくれる時間がとても愛おしいです。多くの先輩方が引き継いできた130年の伝統を大切にしながらも、皆さんの今の立ち居振る舞いは、「神高に新たな彩りを加えてくれているな」と私は心から嬉しく思っているのです。

「神戸高校に赴任して」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ むかしむかしのお話

その坂にはじめて足を踏み入れたのは今から20年以上も前のことになります。2系統のバスを降りると、目の前に聳えるのは話聞いたことのある地獄坂。一步一步が重く感じられたのは傾斜のせいばかりではありません。当時の私は学校現場から県教育委員会の指導主事に転出したばかりのルーキーで、それにもかかわらず国事業のスーパーサイエンスハイスクールに選ばれた神戸高校を担当する役割を課されていたからです。知識もキャリアも、すべてが足りない私です。



それでも、始める前から「できません」というのはご法度です。任された以上、やりきるのが当然のことでした。しかも上司であった岡野幸弘課長は当時30代半ばだった私に同じ言葉を繰り返し唱えてくれました。

「学校の先生方はみんな必死に頑張っているんです。あんたはその先生方を指導しないといけない立場になった。それなら出会う先生方から『ああ、こいつはちょっと違うな。こいつの話なら聞いてもいいか』そう思われる存在にならないと駄目です。『県教委と言ったって、この程度か』先生方にそう見下されたら私たちの存在に意味なんてありません。しっかり勉強して成長しなさい。あんたには格好いい指導主事になってほしいんです」やるしかないな。岡野先生の言葉を頭の片隅に置きながら、地獄坂を何度も上った平成16年。

○ ちょっとむかしのお話

季節が流れ、平成21年4月に本校17代校長となられ、3年間在任した岡野先生は退職後、大学の教授になりました。やがて体調を崩されて入院。お見舞いに伺いたいと願いましたが叶いませんでした。誰にも出会いたくない、とのことでした。「弱っている自分を見せたくはないという思いらしい」そう人づてにお聞きしました。ある意味、そのお蔭でもあります。私の中の岡野先生は今もおしゃれで格好いい姿のままです。

結局、大学教授の職のまま逝去された岡野先生ですが、研究室には実に多くの資料を残しておられました。後任の方のご厚意で私はその資料を譲り受けることができました。その多くは神戸高校の校長時代の式辞原稿です。デジタル活字の紙面のところどころ、癖の強い岡野先生の字が書き足してあります。涙が出ました。

その原稿の中の1枚は、平成23年の東日本大震災直後の終業式で生徒たちに語りかけた日のものでした。「テレビの映像を見て、皆さんは何を思いますか。『大変だな』という感想だけですか。今、日本は未曾有の国難に直面しています。今こそ私達の英知を結集して、この困難に立ち向かわねばなりません。これは1年、2年という問題ではありません。恐らくこの先何年もかかって再建していかねばならない問題です。皆さんは復興を担う第二、第三の世代となるでしょう。そのためには皆さんは今、力を蓄える時です。しっかりと勉強をし、しっかりと人格を磨き、第一線に躍り出た時には十分な力を発揮できるようにしてもらいたい」

○ そして今

令和7年4月、私は22代校長として本校で働くこととなりました。赴任する1週間前、久しぶりに地獄坂を上り、校長室に入りました。窓の向こうから時折、歓声が聞こえます。見下ろすと入学準備のために登校した新1年生を上級生がお見送りするところでした。部活動の勧誘のために、リボンで円を描いてつくったビラの首飾りが上級生から新1年生にかけられていきます。先輩から後輩へ、まるで思いを繋いでいくように。その時はじめて、私は自分が神戸高校に勤める意味が少し解った気がしました。



「岡野先生。あなたがかつて見ていた景色を自分も見ることができるとは思ってもいませんでした。それでも明日からあなたの愛した神戸高校の生徒たちと向き合うことになりました。先生方とともに私も精いっぱい生徒たちを大切にしようと思います。どうか見守っててくださいね」

出会えた意味、託された思いを噛みしめて日々を過ごします。どうぞよろしく願いいたします。

